

日本の労働者階級が勝利する道は われわれのたたかう方針しかない

日刊 動労千葉

87. 3. 6
No. 2494

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五、六（公衆）〇四七二（二二）七二〇七

日本経済が完全に行きづまり、資本主義体制の危機をむかえた中曽根は、この危機を唯一乗り切る策として戦争への衝動を増々強めている。今こそ、戦争への道を拒否し、労働者階級の誇りにかけ、この攻撃を粉碎する方針が求められている。今こそ団結を打ち固め闘いぬかなければならない。



産業報国会の狙いを粉碎

例えば、今から二年前から分割・民営化攻撃と対決するために、動労千葉は二波のストライキを敢行し、組合員のほとんどが処分を受けるという事態をやりきってきた。

分割・民営化という、ある特殊な政治的意図をもつ人間でなかつたら考えつかない攻撃に対して、われわれは攻撃の意図を基本的なところで打ち破き、今日の集会にこれだけ多くの国鉄労働者が集まってきたことの中にわれわれの勝利性が確認できる。新たな闘いの出発点だ。

なぜこう言えるのか。

中曽根・杉浦・松崎は、動労千葉、国労を解体し、一企業一組合をつくり、権力の「意」を労働組合の名をもって遂行する労働組合ならざる労働組合Ⅱ産業報国会にしていくことが狙いだ。

しかし、この狙いは物の見事に粉碎され、マスコミでも「動労千葉や国労の闘士が大挙して新会社に入ってしまった」（二月十八日付毎日新聞）と言っている。

怒り渦巻く「動労」の内部

一方で、こういう攻撃に率先して協力し、労働者を裏切った動労革マルや鉄労はどうか。

東京では「組合のいうことを一生懸命やしたが約束がちがう。新潟に帰せ、秋田に帰せ」という声が渦巻いている。

津田沼の乗務員が、採用通知をカバンに貼り、中野に乗りこんだら、動労革マルがそれを見て涙を流してくやしがあった。労働者の首を切られることを喜び、切れなかつたことに対してくやしがる

というような連中は粉碎・一掃しなければならぬ。

闘う方針・路線以外 労働者は生きられない

日本の労働界はどうか。

総評は自ら解体するということに踏み切った。一方の柱である同盟・JCでは、円高不況で造船・鉄鋼・自動車など日本の基幹産業で数万におよぶ首切りが行われつつある。つまり、同盟・JC型労使協調路線でもだめだということだ。

では、日本の労働者はこれからどういう方針・路線でやらなければならないのか。

答えは決まっている。
われわれの方針でない限り、今日の中曽根の攻撃と対決し、粉碎する道はないことを分割・民営化攻撃の渦中でかちとってきた。

順法闘争、ストライキを やりぬく体制を確立せよ

これからの闘いは、三月十日頃と予測される配属をめぐる差別・選別攻撃を打ち破くために起ちあがらなければならない。これが第一の闘いだ。

差別・選別の不当労働行為を加えてくるならば順法闘争でもやる決意を固めなければならない。

第二には、新会社における闘いをどうするかだ。ポイントにはスト権があるということだ。

十二名の仲間の奪還、さらに、大幅賃上げ、売上税反対とかいろいろ結合してスト権を確立する。そういう体制を確立しよう。

第三には、この間、裏切りを重ねてきた連中に闘いを開始する。

この中心は鉄道労連との対決になる。「旧」動労の労働者に「動労総連合に結集せよ」と大々的に展開する。

そして、国労共闘の諸君は、日共Ⅱ革同による国労の私物化を許さない闘いを絶対にやらなければならない。

この間、われわれが流した血と汗を本当に結実させるために、より以上の団結を強め、多くの仲間を結集を呼びかけ、突き進んでいきたい。